

千手観音菩薩立像

国宝

高さ 5.2 メートルのこの堂々たる像は、仏教における慈悲の神とされることの多い菩薩観音を表している。13 世紀、彫刻家の成朝が最初にこの像の制作を依頼されたが途中で変更になり、別の仏師によって完成された。この観音像は木製で、そのプロポーションは少し離れたところから見るとさらに大きくなるように見える。像の足元から見上げると、通常のプロポーションに見える。

この観音像には全部で 42 本の手があり、そのうちの一对は合掌している。その他は 40 本で、40 という数は伝統的に無限を表す数字なのだが、菩薩がすべての衆生を救うことができる能力を象徴している。手は様々な道具や武器、象徴的なオブジェなどを持っている。

この像は 13 世紀から 19 世紀まで興福寺の食堂の本尊として崇められてきた。像の内部には、1217 年につくられた般若心経など、数多くの品々が収められている。これらの品々は、この像をつくる際の資金調達は、通常よりも長く困難な事業であり、多くの信者や支援者が携わっていたことを示唆している。

744 年につくられた食堂は 2 度にわたって火災で焼失した。そのうちの 1 回は 1180 年に平家の大將・平重衡（1158～1185 年）によって引き起こされた南都焼討であった。その後再建された食堂は数百年間立ち続けたが、1874 年に明治時代（1868～1912 年）の廃仏毀釈の政策により破壊された。千手観音は破壊を免れ、1959 年に食堂の基壇の上に興福寺国宝館が建てられると、そこに収められ、本来の場所に戻った。